

住宅性能の表示に対する一般居住者の意識

－住宅の構造安全に関する研究（その4）－

○久木章江** 石川孝重* (*日本女大, **活水女子短大)

目的 阪神・淡路大震災以降、安全性をはじめとする住宅性能のレベル設定が見直され、今後は性能型の設計に移行しつつある。その際には住まい手が住宅性能レベルに対してわかりやすく認識できるよう、設計者のわかりやすい説明や住宅性能の表示がもとめられるようになる。そこで、現段階で一般居住者が明らかにすることを期待している住宅性能について分析するとともに、性能表示に対する意識についても考察する。

方法 九州各県の一般居住者を対象にアンケート調査を行った。対象は2世代以上の家族で暮らす夫婦で、大部分は40～50歳代である。アンケートの設問内容は様々な住宅性能の重視度合、明らかにすることを期待する項目、性能表示に対する意識などである。また、床に着目して、必要な性能が失われた場合の意識についても調査を行った。

結果 結果の一部を纏めたものを以下に示す。一般居住者の住宅性能に対する意識は比較的高いが、具体的な知識は不足や偏った情報による誤認識なども目立っている。

- ①全体的に安全性よりも居住性に対する重視度合が高い。特に音や外見などの直接分かる被害については特に意識が高いが、目に付かない部分についての意識は低い。
- ②住宅性能で建築主に明らかにすべき項目と建物に表示すべき項目は分化して考えられている。安全性は表示が必要、居住性は建築主にのみ明らかにすべきなどの意識が高い。
- ③性能表示が必要な用途として、公共建物や学校、病院、デパート、劇場などの多人数が使用する用途については必要性が高く評価され、手抜き工事などの減少につながると感じて推進すべきと考えられているが、戸建住宅については消極的な回答も多く見られた。